

ヨブ記1-3章「神のもたらす苦しみ」

1A 神からの試み 1

1B 全き人 1-5

2B サタンの唆し 6-12

3B 雪崩打つ苦難 13-22

2A 体に触れるサタン 2

1B 魂の自由 1-10

2B 共にいる友人 11-13

3A 死を願うヨブ 3

1B 生まれた日の呪い 1-10

2B 死産の願い 11-19

3B 死より苦しい痛み 20-26

本文

私たちの通読は、ついに詩歌に入っていきます。これまでは、出来事を読むことによって、神が人々にどのように関わってきたかを読んでいきましたが、これからは人々がそのまま神に対して、その関係を言い表している部分になります。

ぜひ、ヨブ記に期待してください。人になぜ苦しみがあるのか、その根源的な問いを神に対してぶつけているのが、ヨブ記です。その問いをヨブが真正面から取り組んでいるのですか、私たち自身がその問いを神にぶつけていくことにおいて希望と慰めになります。人は苦しみの中にこそ、神との関わりの堅い土台が敷かれていることを知ります。この書物を通して、確かに神が生きておられることを、これまでにない形で知ることができます。

実は、ヨブ記は、今進行中の西日暮里バイブルスタディのヤコブ書と同じ主題を取り扱っています。ヤコブ書は、試練に遭う時はこの上もない喜びとみなしなさい、忍耐を働かせて、全き人となることができる」と約束しています。そしてその手紙の終わりに、苦難と忍耐について話します。その手本がヨブなのです。「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。(5:11)」

ヤコブ書において、行ないのない信仰は死んだものである、という言葉が出てきます。言い換えれば、語っているだけのクリスチャン、ふりをしているだけのクリスチャンはクリスチャンではないのだよ、と教えています。しかし試練によって、単に信仰を持っているだけ、というのではない、真実と行ないを伴っている信仰へと変えられるのだ、ということを教えています。その手本としてヨブ

が使われているのです。

ヨブの正しさが、初めと終わりでは変わります。初め彼は、細心の注意をもって、彼は主を恐れ、悪から遠ざかっていました。それにも関わらず苦難が襲いました。そこで神になぜなのかという問いを行ない、その悪戦苦闘の中で神ご自身が現われました。そして彼は神の前でへりくだり、悔い改めです。そこにある彼の義は初めの正しさとは変わっていました。成熟した義と言ったらよいでしょうか、神の前における自分の立ち位置が変わったのです。

1A 神からの試み 1

1B 全き人 1-5

1:1 ウツの地にヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていました。1:2 彼には七人の息子と三人の娘が生まれた。1:3 彼は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを持っていた。それでこの人は東の人々の中で一番の富豪であった。

ヨブの紹介です。彼は「ウツ」の地の人であるとあります。ウツがどこにあるか定かではありませんが、「東の人々」とあります。彼の友人にテマン人エリファズがおり、またヨブの家畜をシェバ人とカルデヤ人が襲うことから、エドム辺りであったらうと考えられます。そして、時はアブラハム、イサク、ヤコブの族長時代であらうと考えられています。地名や人物の名前が、創世記の族長時代に出てくるものと同じか、似ているからです。ヨブ自身 140 歳まで生きたこと、このようにたくさん家畜を有していることも、アブラハムと似ています。

そして、彼は「潔白で正し」い人でありました。口語訳は、「全く、かつ正しく」となっています。彼は十分に正しさにおいて整えられた人という意味です。これが、これからヨブ記を見ていく時に大切な背景となります。彼には、これだけの苦しみを受ける罪が見いだせなかったのです。だからこそ、後でヨブは悩みます。なぜ神が無意味に、やみくもに自分を苦しめるのだろうか、というものです。

そして、「神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」とあります。箴言に、「主を恐れることは悪を憎むことである。(8:13)」とあります。主がここにおられると知るならば、自分は悪を行なうことはできませんね。後にヨブが、いかに神を恐れて悪から遠ざかっていたかを読んでいます。貧しい者には分け与え、乙女を情欲をもって見ることを避けていた、などです。

1:4 彼の息子たちは互いに行き来し、それぞれ自分の日に、その家で祝宴を開き、人をやって彼らの三人の姉妹も招き、彼らといっしょに飲み食いするのを常としていた。1:5 こうして祝宴の日が一巡すると、ヨブは彼らを呼び寄せ、聖別することにしていました。彼は翌朝早く、彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない。」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。

息子たちは七人います。それぞれ分担して、一人ずつ回して、祝宴をする家を変えていました。そこに毎日、彼らは飲み食いしていました。これは、家族の絆が強く結ばれるためです。そこでヨブは、私たちにとってはここまでしますか？とってしまいますが、息子たちや娘たちの心の中までに気にかけて、それで全焼のいけにえを捧げていました。その豊かさの中で神を忘れてしまっただけではない、と思ったのでしょうか。彼は、アブラハムと同じように富に惑わされる人ではありませんでした。

2B サタンの唆し 6-12

5 節までが地上に起こっている出来事です。しかし、6 節以降に天において物事が展開します。ここで起こっていることによって、ヨブに対する不条理が一気に始まるのです。私たちはこの地上に住む者たちなのですが、いつも何らかの形で理解を超えることが起こります。どうして、こんなことになっているのか、と理解に苦しむことが起こります。これはちょうど、二次元の世界に生きているのに、三次元の世界が二次元の世界に入り込んで来るような状態です。

しかし私たちは、何か問題が起こるとそれが人間による過失や過ちによるものだ、と限定してしまう傾向があります。もちろん人間に問題があるかないか追及することは大切です。しかし、私たちは天における問題、神の問題があることを知らないといけません。これは、神の主権の中で起こっている問題なのだ、という認識です。ダビデは詩篇で、「主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。(131:1)」と言いました。人がしているというよりも、神が物事を運んでおられるということです。

この信仰がないと、私たちは全てを白黒はっきりさせようとし、二面的にしか物事を見ることができず、人を裁くようになります。これからヨブの友人が、彼を裁き始めるのですが、それを犯してしまうようになるのです。

1:6 ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。1:7 主はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて言った。「地を歩き回り、そこを歩き回って来ました。」

「神の子ら」というのは、御使い、天使たちのことです。ある日に、天使たちが主なる神の前に集まっています。いわば、自分たちの一日の活動を神の前に報告する御前会議のようなものだ、とある注解にありました。天使について、彼らは仕える霊であるとヘブル書の著者は説明しています(1:14)。

しかし、そこに異質な存在がいました。そうです、サタンです。サタンは墮落した天使ですが、それでも天使の一人であります。彼は、神の御座のところにもいました(エゼキエル 28:11-19)。しかし、自分の美によってうぬぼれ、高慢になって、神になろうとしたため、そこから追い出されました。

それ以来、彼は、新約聖書では「空中」と呼ばれるところに権力を持っています(エペソ 2:2)。それは、天におられる神の前に出ていくことのできると同時に、地を徘徊できると地にも接触できるような空間です。それから、終わりの日にミカエルとの戦いにおいて敗れて、地上に突き落とされるという預言が黙示録 12 章にあります。

そしてサタンは、神に対して「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」と言っています。サタンは神と異なり、あらゆるところに存在する偏在の性質はありません。しかし、地上のあらゆるところを歩き巡る能力はあります。そのことによって、サタンはこの世を支配する者として出てくるのです。特にここで、「生き巡り、歩き回る」という言葉に、サタンの人を滅ぼしたい欲望が現れています。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。(1ペテロ 5:8)」

1:8 主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」

サタンは主の前に呼び出されています。主は誇らしげに、ヨブに対してサタンが何ら手を出せないであろうと語っておられます。主はヨブを知っておられました。ヨブは主がサタンと自分のことについて、こんな会話がなされているだろうとは思わなかったでしょう。しかし、この真理を知ってください。私たちは、神に愛された者として、神を知っている前に神に知られている、ということです。「しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。(1コリント 8:3)」

1:9 サタンは主に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。1:10 あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。1:11 しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろくに違いありません。」1:12 主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは主の前から出て行った。

サタンの黙示録 12 章で、「兄弟たちの告発者」だと呼ばれています。ヨブが神を恐れているのは、彼に財産が与えられているからだと告発しています。彼に利益が与えられているからこそ、ヨブは神を敬っているのだ、という告発です。このサタンの挑戦に対して神は受けて立っておられます。ヨブが果たして全財産が奪い取られても、なおのこと主をほめたたえるなら、彼の主への敬いは財産によるものではないことが証明されるからです。

午前礼拝で学びました、私たちが神を敬うのは、神が神だからという理由だけで敬っているのか、それとも神が何か良くしてくださっているから敬っているのかの違いです。もちろん私たちは、神が自分に良くしてくださり、自分を愛し、祝福されていることを期待し、また信じていきます。けれども、

たとえそうでなくとも、私は神を信じ、神に服従するという関係があるかどうかなのです。

そしてもう一つ、サタンが完全に主なる神の僕であることに注意してください。主が他の天使たちと同じように、サタンに対して命じられており、サタンは神の許された範囲でしか動くことのできな存在であるということです。神がヨブの財産に「垣」を作っておられることを、サタンは知っていました。私たちはしばしば、自分の持ち物や健康などが守られていることが、実は神が垣根を作っておられるからだということを忘れてしまいがちです。そして、神が「彼の身に手を伸ばしてはならない」と言われたとおり、サタンはこの時点では彼の体に手を出せませんでした。そして、「主の前から」サタンが出ていっています。主の権威の中にサタンがいたことを、はっきりと示す言葉です。

したがって、私たちは悪について知らなければいけないことが二つあります。第一に、それは神が造り出したものではないことです。「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。(ヤコブ 1:13)」神が悪の創設者ではないことです。

しかし、第二に神は悪をもご自分の主権の中に入れておられるということです。神の主権という意味では、神が悪を引き起こしておられます。イザヤ書には、「わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。(45:7)」とあります。したがって、この世で起こっている理不尽なことを、サタンのせいであり神は関わっておられないと考えてはいけません。サタンのせいだけにしていれば、神は善、サタンは悪と二元論で片づけることができます。しかし、もしそうなら、神は悪に対して手に負えない存在なのだということになってしまいます。しかし神は全能です、神は主権者です。悪についても、神が責任をもってその問題を引き起こしておられるのです。

ここに、ヨブのこれからの葛藤が生まれます。なぜ、神が私を苦しめるのか、という葛藤です。これがヨブ記のテーマです。その葛藤こそがヨブを練り清め、品性を作り出していきます。

3B 雪崩打つ苦難 13-22

1:13 ある日、彼の息子、娘たちが、一番上の兄の家で食事をしたり、ぶどう酒を飲んだりしていたとき、1:14 使いがヨブのところに来て言った。「牛が耕し、そのそばで、ろばが草を食べていましたが、1:15 シェバ人が襲いかかり、これを奪い、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

シェバ人とは、あのシェバの女王の出身地です。アラビヤ半島の南部です。当時はこのように略奪をして生きている民族だったようです。

1:16 この者がまだ話している間に、他のひとりが来て言った。「神の火が天から下り、羊と若い者

たちを焼き尽くしました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

神の火というのは、天災のことです。人によって焼かれたのではなく、雷などによって焼かれてしまったということです。

1:17 この者がまだ話している間に、また他のひとりが来て言った。「カルデヤ人が三組になって、らくだを襲い、これを奪い、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

カルデヤ人は、バビロン地方からの者たちです。シェバ人は南から襲ってきましたが、カルデヤ人は北から襲撃しました。

1:18 この者がまだ話している間に、また他のひとりが来て言った。「あなたのご息や娘さんたちは一番上のお兄さんの家で、食事をしたりぶどう酒を飲んだりしておられました。1:19 そこへ荒野のほうから大風が吹いて来て、家の四隅を打ち、それがお若い方々の上に倒れたので、みなさまは死なれました。私ひとりだけがのがれて、あなたにお知らせするのです。」

最後は荒野のほうからの風で家が倒れ、息子、娘たちが死にました。これらの災いが、雪崩が下るように一気に下りました。このような、連続した不幸は現実にあります。一つの問題だけで恐ろしくて耐えがたいのに、それが連続して起こる試練があります。このような時に信仰を捨てて、神を呪ってしまいたくなります。しかしヨブはしませんでした。

1:20 このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、1:21 そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」1:22 ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。

午前礼拝の説教をぜひお聞きください。この言葉を聞けば、自分はヨブのような立派な人間にはなれないと思います。しかし、実はそこがヨブ記の焦点ではないのです。この後、ヨブは自分の体が打たれます。そして自分の生まれた日を呪います。それから、激しい言葉を友人に対して、また神ご自身に対して使います。こちらのほうがヨブ記の焦点になっています。だから、私たちに希望を与え、慰めを与えるのです。私たちが苦しむ時の現実に真正面から向かっている彼の姿から、私たちは慰めを得ます。

注意深く見ていきますと、これからヨブは神に訴えますが、一線を越えることはありません。生まれたことを呪いが、神を呪うことはありません。死にたいと言いますが、死にませんでした。彼には主との関係に基本的な土台がありました。それがここでの告白です。「主は与え、主は取られる」と

いう土台です。神の主権に抛り頼んだ信仰があったので、彼はこれで最後まで耐え忍ぶことができました。

2A 体に触れるサタン 2

ヨブは、ヤコブ書にある、まさにこのことを行ないました。「ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。(ヤコブ 4:7)」しかし、ここで私たちが知らなければいけないのは、サタンは執拗であるということです。そしてサタンは、私たちがただ滅ぼすという目的で生きています。次にサタンは、何も持っていないヨブに対して、その皮膚に触れることを神に申し出ます。

1B 魂の自由 1-10

2:1 ある日のこと、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンもいっしょに来て、主の前に立った。
2:2 主はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて言った。「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」
2:3 主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない。彼はなお、自分の誠実を堅く保っている。おまえは、わたしをそそのかして、何の理由もないのに彼を滅ぼそうとしたが。」

再び、神はヨブを誇らしげに語っておられます。神は、ヨブを知っておられるのです。ヨブがこの試練に耐えられることを知っておられます。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。(1コリント 10:13)」私たちが試練に遭う時、神は、私たちの信仰が弱いからそれを懲らしめようと思って試練に遭わせるのではなく、むしろ私たちにくださった信仰に誇りを持っているから、試練に遭わせるのです。それは、私たちの信仰というよりも、神が賜物としてくださった信仰であり、神の憐れみの対象になっている表れです。

2:4 サタンは主に答えて言った。「皮の代わりに皮をもってします。人は自分のいのちの代わりには、すべての持ち物を与えるものです。2:5 しかし、今あなたの手を伸べ、彼の骨と肉とを打ってください。彼はきっと、あなたをのろうに違いありません。」

つまり、「肉体を打てば、ヨブも体当たりしてあなたに盾付くだろう」ということです。私たちは、自分の体の治療のためなら、今の全財産をもってしてもそれを実行しようとしています。体が健康であるからヨブも、神を呪うことをしなかったのだ、とサタンは言っています。

肉体というのは、人間にとって大きなテーマです。実に神は、ご自分のキリストをその肉体において傷つけたことによって、私たちに魂と肉体の癒しをもたらされました。「彼への打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:5)」肉体で起こっていることと、私たちの魂は深く関わりのあるものです。この肉体が減んで、私たちの霊と魂は天国に行くから肉体のことを考えるのはおかしい、

という考えは非聖書的です。もしそうならば、神は私たちに復活の体、新しい体を与えることはなされません。神が復活の体を与えるという情熱があるということは、この肉体にも大いなる関心を持っておられるということです。

したがって、ヨブの体が打たれることによって、命についての壮絶な戦い、その根本の問いかけが始まります。もし財産だけ失われただけなら決して生まれてこなかった、神に対する問いかけを私たちは、肉体が損なわれたという出来事によって見る事ができるのです。

2:6 主はサタンに仰せられた。「では、彼をおまえの手に任せる。ただ彼のいのちには触れるな。」

ここは大事です。命には触れてはいけない、ということです。この命というのは、単に肉体の生命が生きているだけではなく、内なる人も生かしているということでもあります。ヨブに与えられた自由意思、その魂も生かされているということです。魂と肉体は深く結びついています。しかし、はっきりと区別できます。そして、霊と魂は肉体から自由になれるのです。そして神を選び取ることができるのです。

2:7 サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物で彼を打った。2:8 ヨブは土器のかけらを取って自分の身をかき、また灰の中にすわった。

「悪性の腫物」と訳されているこの言葉は、出エジプト記の十の災いの一つにあった「腫物」にも使われています(9:8-10)。具体的にどのような皮膚病だったのかは意見が分かれます。象皮病だったのではないかという意見もあるし、天然痘ではないとも言われています。病名はともあれ、症状を見ていくと本当に苦しいものです。一つに、非常な痒みをとまいません。土器の欠片を取って自分を書いています。灰の中に座ったというのは、その痒みを軽減するためのものだったでしょう。

そして、他の箇所も見てみます。「私の肉はうじと土くれをまとい、私の皮は固まっては、またくずれる。(7:5)」蛆が出てきています。「私の骨は皮と肉とにくっついてしまい、私はただ歯の皮だけでのがれた。(19:20)」骨が見えそうになるまで肉が剥がれ落ちています。「私の息は私の妻にいやがられ、私の身内の者らにきらわれる。(19:17)」息がくさくなり、嫌がられる程になりました。そして、「私の顔は泣いて赤くなり、私のまぶたには死の陰がある。(16:16)」とありますが、視力も失われていたと考えられます。¹

2:9 すると彼の妻が彼に言った。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」2:10 しかし、彼は彼女に言った。「あなたは愚かな女が言うようなことを言

¹ 「ヨブ物語」<http://www2.plala.or.jp/Arakawa/job07.htm>

っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか。」ヨブはこのようになって、罪を犯すようなことを口にしなかった。

この妻の意見は、確かに愚かです。神を呪えば死ぬるではないか、と言うことですが、もちろん愚かです。これこそ、サタンが神に唆したことです。しかし、人間としては正常な感覚ではないのかと思います。すなわち、肉体の痛みは死ぬよりも過酷なことだ、ということです。妻も夫と同じように苦しんでいるのです。すべての財産を失い、失った息子と娘は彼女の子供たちでもあったのです。そして夫の看病を今ここでしなければならず、主への誠実を守っている者がこんな目になっているのであれば、一層のこと呪って、神に打たれて死んだほうがずっと楽になれる、と思ったに違いありません。

神を呪うことはヨブの言うように愚かなことです。しかし現実には、主に仕えている人々に続けざまに病やその他の不幸が襲ってきて、その傍らにいる妻や家族の者たちが辛い所を通っているというのは、現実であります。私たちは何度も何度も聞いてきました。こんなことになるのであれば、主に仕えないほうが良いではないかというのは正常な感覚です。しかし愚かです。

未開の地に行った宣教師夫婦が、たった一人の子だけを回心に導いた後に妻が病気にかかって死にました。それで残された夫は、神に対して苦みを持ち、それから死ぬ直前まで神の名を一切口にしないほど、信仰を捨ててしまったという話があります。しかし彼は、その一人の子によって村全体が救われ、今はキリスト教の学校も建てられ、十万人の信者になっており、その話を彼は何十年も後に死ぬ直前に聞きました。そして、悔い改めて天に召されました。

しかし多くの主の奉仕者は、そのような悲惨な目に遭っても、やはり主を捨てることなく、主に仕え続けています。まさに、ここにあるヨブと同じ姿勢です。しかし、主に仕えていてその人たちがいつも立派な勝利の信仰を持っているかと言えば、そうではないのです。三章以降のヨブの独白は、主に仕えていてもなおのこと抱えている、自分の肉体の弱さから出てくる呻きと叫びであります。

2B 共にいる友人 11-13

2:11 そのうちに、ヨブの三人の友は、ヨブに降りかかったこのすべてのわざわいのことを聞き、それぞれ自分の所からたずねて来た。すなわち、テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルである。彼らはヨブに悔やみを言って慰めようと互いに打ち合わせて来た。

ヨブの三人の友人の登場です。エリファズは、エドム人の名前です(創世 36:4)。そしてテマンはエドムにあり、知恵のあるテマンとして知られています(オバデヤ 8)。ビルダデはシュアハ人とありますが、アブラハムのサラの死後のもう一人の妻、ケトラから生まれたシュアハから来ています(創世 25:2)。ですから、舞台は族長時代であり、セム系の人たちであることは確かで、それゆえ彼らには神の知識があったと考えます。

2:12 彼らは遠くから目を上げて彼を見たが、それがヨブであることが見分けられないほどだった。彼らは声をあげて泣き、おのおの、自分の上着を引き裂き、ちりを天に向かって投げ、自分の頭の上にまき散らした。2:13 こうして、彼らは彼とともに七日七夜、地にすわっていたが、だれも一言も彼に話しかけなかった。彼の痛みがあまりにもひどいのを見たからである。

ここから、この三人がヨブのことを思いやっている、とてもすばらしい友人であったと感じ取れます。病院でお見舞いに行き、そこで大変な状況になっているのを見ても、なるべく顔の表情には出さないものです。おそらく彼らもそうだったでしょうが、しかし、そうした気づかひも吹っ飛ばすほどのヨブの変わりようでした。だから、自分たちも上着を裂き、ちりを天に向かって投げ、頭の上にまき散らしています。しかし、彼らはやって来たのです。このような姿に変わり果てた人のところに、普通は近づこうとしません。ですから私は、三人はよほどヨブのことを愛していた友であったと考えます。

そして何と、一週間、彼らに一言も話しかけずに共に地に座っていました。ここにも、この友のすばらしさがあります。声をかけられないけれども、一緒にいたのです。苦しむ人々にとっての福音の言葉は、共にいることであるとしばしば言われます。話さなくても、共にいることこそがキリストを伝えることができます。この原則を彼らは知っていました。習っていないかも知っていたことでしょう、それだけヨブを愛していたのです。

しかし、ヨブ記はこの友情がごとく崩れていく姿を、まざまざと描いています。3章から長い、長い議論が続きます。エリファズが年長なのでしょう、ヨブの言葉に初めに応え、その次にエリファズ、それからビルダデがヨブの言葉に反応します。これが三回あります。その度に、語ることは激しくなり、最後はこんなこと言っているのかと思われる程の酷い言葉に成り果てました。

ここから私たちは何を学ぶかと言いますと、徹底的に人間的な愛には限界がある、ということですね。神のみが義であり、そして私たちは神の前でへりくだり、悔い改め、そして和解することによってのみ、神の義を身につけることができるということです。

3A 死を願うヨブ 3

1B 生まれた日の呪い 1-10

3:1 その後、ヨブは口を開いて自分の生まれた日をのろった。

ヨブはついに、口を開きました。そこから出てきたのは、激しい呪いの言葉でした。しかし、神を呪う言葉ではありません。自分の生まれた日を呪う言葉です。しかし、なぜここでヨブが変わってしまったのか？これだけ立派に信仰を保っていたのに、こうなってしまったのか？まず、彼が神を呪っていないことを注目すべきです。彼は、それをしようにもできなかったと言ったほうがよいでしょう。彼には、主は与え、主は取られるという信仰の土台がありました。神を神としてあがめていました。したがって、神は呪えないのです。

しかし、自分の生まれた日を呪いました。なぜ、このような激しい言葉が出たかと言いますと、これは七日七夜、友人がそばにいたからです。何も口を出さないでそこにいてくれたからです。だから、潔癖に生きてきたヨブであっても、肉体の弱さから来る自分の心の弱さを明かしてもいいという、心の開きがありました。信頼する友だからこそ心を許したと言えます。

3:2 ヨブは声を出して言った。3:3 私の生まれた日は滅びうせよ。「男の子が胎に宿った。」と言ったその夜も。3:4 その日はやみになれ。神もその日を顧みるな。光もその上を照らすな。3:5 やみと暗黒がこれを取り戻し、雲がこの上にとどまれ。昼を暗くするものもそれをおびやかせ。3:6 その夜は、暗やみがこれを奪い取るように。これを年の日のうちで喜ばせるな。月の数のうちにも入れるな。3:7 ああ、その夜は、はらむことのないように。その夜には喜びの声も起こらないように。3:8 日をのろう者、レビヤタンを呼び起こせる者がこれをのろうように。3:9 その夜明けの星は暗くなれ。光を待ち望んでも、それはなく、暁のまぶたのあくのを見ることがないように。3:10 それは、私の母の胎の戸が閉じられず、私の目から苦しみが隠されなかったからだ。

私たちは誕生日を祝います。誕生日を祝うことによって、自分がここまで生きてきたことを感謝するわけです。しかし、その逆をヨブは行っています。その喜びの日を逆算して、無くしてしまおうとしています。ところでレビヤタンとありますが、これはヨブが神の前で悔い改める直前に、神がヨブにお見せになる海に住む、火を吐く竜の存在です。「すべての誇り高い獣の王」であると主は言われています(41:34)。

この表現を読むと、イエス様が十字架に付けられた時のことを思い出します。昼間なのに闇になりました。過越の祭りでありましたが、喜びの声は失われました。イエスが神の呪いを受けられて、終末の様相を呈した徴が天に起こったのです。

2B 死産の願い 11-19

3:11 なぜ、私は、胎から出たとき、死ななかったのか。なぜ、私は、生まれ出たとき、息絶えなかったのか。3:12 なぜ、ひざが私を受けたのか。なぜ、私の吸う乳房があったのか。3:13 今ごろ、私は安らかに横になり、眠って休み、3:14 自分たちのためにあの廃墟を築いたこの世の王たち、また議官たち、3:15 あるいは黄金を持ち、自分の家を銀で満たした首長たちといっしょにいたことであろうに。

誕生日を呪った後で、次に死産になればよかったと言っています。「ひざが私を受けろ」とありますが、これは族長に子が与えられる時に、自分の相続の子として受け取る儀式であります(創世50:23)。そうすれば、陰府において安らかに過ごすことができるのに、ということです。

3:16 それとも、私は、ひそかにおろされた流産の子のよう、光を見なかった嬰兒のようでなかったのか。3:17 かしこでは、悪者どもはいきりたつのをやめ、かしこでは、力のなえた者はいこい、

3:18 捕われ人も共に休み、追い使う者の声も聞かない。3:19 かしこでは、下の者も上の者も同じで、奴隷も主人から解き放たれる。

ヨブは出産直後の死のみならず、出産前の流産に拠る死も願っています。そして陰府の世界を再び繰り返しています。彼の強調点は、陰府においては、金持ちも貧しい者も、力ある者も、捕られ者も同じようにいる、ということです。死は生きている時の経済格差や力関係をすべて平等にします。

3B 死より苦しい痛み 20-26

3:20 なぜ、苦しむ者に光が与えられ、心の痛んだ者にいのちが与えられるのだろう。3:21 死を待ち望んでも、死は来ない。それを掘り求めても、隠された宝を掘り求めるのにすぎないとは。3:22 彼らは墓を見つけると、なぜ、歓声をあげて喜び、楽しむのだろう。3:23 神が囲いに閉じ込めて、自分の道が隠されている人に、なぜ、光が与えられるのだろう。3:24 実に、私には食物の代わりに嘆きが来て、私のうめき声は水のようにあふれ出る。

ヨブは、死ぬことよりも、生きていて痛みを持っていることのほうが苛酷であるということを話しています。「死を待ち望んでも、死は来ない」と言っていますが、これは自分の手で命を取ろうとする考えが何一つないことを表しています。死にたいと思っているのですが、この命は神のものであり、神の御手の中にあることをよく知っているのです。

聖書の中に、命を取る者たちが出てきます。サウルがそうでした。アヒトフェルがそうでした。そしてイスカリオテのユダがそうでした。彼らとこのヨブとを比べてください。何が違うか？ 神の主権を受け入れているかそうでないかの違いなのです。主が与えて、主が取られるのです。主が取られるのでなければ、自分は自分の命に対して何もすることができないのです。

3:25 私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。
3:26 私には安らぎもなく、休みもなく、いこいもなく、心はかき乱されている。

自分のうちに、これだけは起こらないでくれと願っていたものがあって、それが起こってしまったことの衝撃を言い表しています。

ヨブの言葉は、このように激しいものになりました。しかし、私たちは不思議になぜかこの激しい言葉から慰めを受け、希望を持つことができるのです。なぜか？ 彼は単なる神への愚痴で終わらせていないからです。この苦しみを、まるで裁判で争う者であるかのような強さをもって言い表しています。そこに、苦しみにおける神の正しさへの疑問がこんなに浮き彫りにされています。これが、私たちが生きている時の現実だからです。「仕方がない」として過ぎ去らせてきた不条理を、そのまま神に訴えている言葉だからです。しかも、神がおられる、神がこのことをされているという前提

で話しています。神を呪い、神を否む者の語っている言葉ではないので、まさに現実を直視し、神の義に対して問いかけている、真剣勝負の議論になっているからです。

ヨブ記を完読しても、おそらく「苦しみに対する答えはこういうものだったのだ、なるほど！」という、池田彰さんのような解説と回答は期待できないのです！完読しても、やはり理解できないのです。しかし、その真剣で、激しい問いかけの過程そのものが大事であり、そこに神と共に生きることの意味を深く知ることができるようになっていきます。これまでクリスチャン的に生きていたのが、クリスチャンとして生きていくようになっていく、つまり成熟していくことができます。